

II. 日本における「単一民族神話」の歴史的起源と変遷過程(その3)

一戦後日本における「単一民族神話」の発明と呪縛一

浅野慎一(神戸大学)

戦後日本の「民族意識」の特徴

- ①「島国」内部で文化的に純粋培養された同質性。(≠戦前:「アジアサイズの混交種」)
- ②希薄な「民族意識」。(「国民意識」「個人主義」が優越)。but & so 「単一民族神話」。
ex) オリンピック応援・選挙:日本国民(≠日本民族)。

【戦後日本の「単一民族神話」と土壌と限界】

- ①戦前の「アジアサイズの混交種」神話への反省。
「島国」の外への侵略・膨張:「悪」。「島国」単位:「善」。
- ②戦後、被抑圧民族の民族独立・民族自決:「正義」。
多民族国家:民族自決が不徹底な国家。
「同質的な単一民族」=「善」。
BUT それだけでは希薄な「民族意識」は説明不可能。
∴ 1)民族独立・民族自決:明確な「民族意識」が前提として成立。
2)侵略戦争を真に反省:植民地人民の民族自決・民族独立についての明確な認識不可欠。
3)戦後の日本:対アメリカ従属。民族独立・民族自決の課題に直面。BUT 自覚・認識の希薄さ。
4)戦前への反省が貫徹されていれば、戦後、在日外国人差別・排除は発生せず。
5)戦前への反省:沖縄・アイヌにはなぜ及ばず?
6)天皇家を総本家とする疑似的血統主義・家族国家観は終焉。では、新たな「核」は?
→「戦前への反省」/「民族独立こそ正義」のみではない新たな歴史的文脈・「核」で、
戦後の「単一民族神話」が創出。

【戦後日本の「単一民族神話」の発明】

日本敗戦→アメリカの単独占領。

- 初期の対日占領政策:1)日本帝国主義復活の阻止。(=連合国の総意、小国)
2)東西冷戦下、「アメリカの目的を指示する政府」の樹立。(=非共産主義)。
1947年頃～、東西冷戦の激化、特に中国での共産党優勢→アメリカの対日占領政策の大転換。
1948年、日本を「反共産主義の防壁・極東の工場に」(ロイヤル声明)。
1949年、中華人民共和国成立。
1950年、朝鮮戦争勃発。特需:日本の経済復興の手掛かり。
1952年、サンフランシスコ講和条約・日米安保条約。日本:対米従属下で経済成長実現。

1955年～1974年、高度経済成長。

アメリカ世界戦略:INF-GATT体制:1\$=360円

朝鮮戦争・ベトナム戦争の特需。東南アジア諸国へのドル散布。

日本:輸出主導型高度経済成長。「世界の工場」として経済成長・「世界第二の経済大国」へ。

「日本株式会社・計画経済」。国家主導の産業(製造業)政策。

ex)「所得倍増計画」、全国総合開発計画、太平洋ベルト地帯構想。

労働力流動化政策(国内農村人口の都市への流動化。「島国」内部の純粋培養型労働市場)

国民にも「恩恵」:国民春闘→実質賃金の上昇。国民皆保険・社会保障・国民年金。

一国単位の輸出主導型経済成長・国内労働力流動化政策・国民経済生活の向上

=「島国」単位の「単一民族神話」の基盤。「島国」にリアリティ。

* 1950年代～70年代、欧米諸国の高度経済成長:多国籍企業化・移民(外国人)労働力の導入・活用。

1950年代～70年代当時:日本のみ。輸出主導型・国内労働市場。「世界の工場」。

→1970～90年代、NIEs・ASEAN →1990年代～ 中国。

グローバル・ナショナル・ローカルの多元的重層:EU。

国民主義・一国主義・ナショナリズムの維持:東アジア。

戦後日本の「単一民族神話」の歴史的な文脈・「核」:対米従属下での経済成長・経済大国化。

(≠「戦前への反省」・「民族自決・民族独立の尊重・自覚」)

- ∴ 戦後日本人の「平和」：反帝国主義・民族独立で勝ち取るものではなく、（米国によって）与えられた非戦争状態の中で、（できるだけ）非軍事的な経済活動に専念すること。
- 「民主主義」：反帝国主義・民族独立で闘い取るものではなく、単なる機会の均等（個人の能力主義競争を保証する機会均等＝階級格差の肯定）
& 議会制民主主義・選挙。
- 「平和」と「民主主義」＝一国（島国）単位の経済成長・近代化を通して実現。
- 「民族」への固執＝「封建的」。（「近代化の基盤」であったことは無視）
「民族」に固執しない「個人」こそ健全・普遍的な近代人。
- 経済成長の基盤・近代化の模範＝米国。反米・独立は非現実的・無意味・無関心。
- 民族解放・反帝国主義の闘争を通して「平和と民主主義」を勝ち取った諸民族には理解不能な
「平和と民主主義」観。
- 普遍的な近代化（反封建主義）を体現するアメリカの指導の下、
「日本」を単位としつつも民族意識なき「同質な個人」としての「単一民族神話」の発明。
& 植民地喪失の下、新たな経済発展・近代化・高度経済成長を実現するための思想基盤。
- ∴ 戦後の「単一民族神話」＝反帝国主義・民族独立の立場から侵略戦争を総括せず。
侵略戦争の歴史を忘却。
- ex) 在日朝鮮人・中国人に対する諸政策。典型的な日本国民の認知枠。

【戦後の「単一民族神話」と日本社会の特質】

- ①日本国内に現存する少数民族・異国籍者に対する排除・同化の強制。
少数民族の固有の権利、独自の民族文化の発展は阻害。
「いるけど、いないのと同じ」。「こだわる方がおかしい」。
その圧力は、日本民族内部のさまざまな異質者にも。個性の軽視。
- ②高度経済成長を支えた労働者の多く＝国内農村出身者。
民族的な異文化接触をほとんど経験せず。
→戦前の日本農民のイエ制度に基づく「勤勉と忍耐」・「和の精神」の維持・再生産。
→同質性（日本型企业社会・高度経済成長・管理主義教育等）。
外国人労働者の流入阻止：日本型企业社会になじまない異質の価値観の流入を阻止。
終身雇用・年功序列・日本型企业社会の不可欠の基盤。
日本の労働者階級の「勤勉と忍耐」に貫かれた「（企業）共同体の『和』の精神」を維持・発揮。
過労死等。
- ③一種の平等性に基づく競争主義。（皆、同じ、日本人。後は能力・努力の競争）
大量生産に適合的な同質的国内市場・同質的生活様式。
「世間並」を求める横並び的な生活水準向上に向けた競争の土壌。
言語・文化の単一性：進学・就職・昇進等を通じた各階級・階層への選別：平等な競争の結果。
民族的同質性を前提とした差別化＝業績的・経済的（量的）基準に一元化→
→能力主義競争（メリトクラシー）・学歴社会・階級格差が正当化。
& 競争に勝ち抜くために一層、「勤勉と忍耐」にも磨き。
「国民教育」の普及。
教育基本法：「教育の目的＝（日本）国民の育成」、「教育の機会均等」。＝民主主義。
- ④欧米：外国人労働者が多く配置された不安定労働部門
日本：兼業農民・女性・周辺への還流を前提とした出稼農民・沖縄出身者が配置。
農業や家事、周辺での生活と賃労働を両立：資本の側からは「二流の労働者」
→臨時工・パートなど不安定な雇用形態・劣悪な労働条件。
正規雇用と非正規雇用の隔絶した労働条件格差。
農業・農村＝工業・都市への労働力供給源として再編→日本は「先進」諸国ではほぼ唯一の食料輸入大国、
過密・過疎問題。
女性の不安定労働力化＝日本型企业社会における男性の長時間・過密労働とセット
→「男は仕事、女は家庭（パート）」という性別分業・女性差別を強固に維持。

※ 「単一民族神話」：マイノリティの排除／マジョリティへの「呪縛」。